Japanese Association for Tibetan Studies

ダライラマ13世寄贈の一連のネパール系写本について

――『瑜伽論』「摂決択分」梵文断簡発見記――

松田和信

【0】 一昨年11月，ロンドンのインド省図書館における中亜写本の調査(1)から帰国すると，一通の手紙が私を待っていた。手紙はレニングラードのクチャノフ (E.I. Kychanov) 博士からのもので，以前に私がソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所のボンガード＝レヴィン (G. M. Bongard-Levin) 博士を通して依頼しておいたレニングラードにある一連のネパール系梵文写本のマイクロフィルムを別便で送付した旨の通知であった。この写本は，かつてオーバーミラー (E. Obermiller, 1901-1935) が一度は手にしながら，彼が研究した既証定の一文献を除いて忘れられ，人知れず眠っていた世界の孤本である。私は期待してフィルムを待ったが，不幸にも郵送事故が発生し，交渉の末，再送付されたフィルムが私の許に届いたのは，昨年の6月下旬になってからであった。この写本を閲覧できたことは，私には感慨深いものがあるが，34歳で早世したオーバーミラーから50年の歳月を経て，彼と同齢の私による写本再発見の経緯と証定の結果をここに記し，東洋の片隅からロシアの偉大な仏教学者を偲ぶこととしたい。

【1】 1914年，ロシアの学者，ミロノフ (N.D. Mironov) は，当時ペテルスブルグのアジア博物館にあったネパール系梵文写本の目録を出版した(2)。この中でミロノフは，Ms. Ind. VII. 23という登録番号の付いた一連のネパール系写本を紹介している。この写本は現在ソヴィエト科学アカデミー・アジア民族研究所のレニングラード支部にカタログと同じ登録番号で保存されている。ミロノフによると，Ms. Ind. VII. 23 は，同サイズのネパール紙に同じ書体で書かれた四種の文献を一纒にした写本で，全部で24葉よりなる。なお，24葉はいずれも左端が破損しているが，近代の紙本ではなく，ネパール系貝葉本に見られるような古い書体で書かれた注目すべき写本である(3)。ミロノフは写本に含まれる四種の文献について，次のように420番から423番までのカタログ内通し番号を付けている(4)。

No. 420, 3 folios, Unidentified sūtra (Complete)
No. 421, 12 folios, Unidentified sūtra (Fragment)
No. 422, 1 folio, *Buddhāvataṃsakasūtra* (Fragment)
No. 423, 8 folios, *Third Bhāvanākrama* (Complete)

ミロノフに分かった点は，423番の8葉が *Third Bhāvanākrama* の完本であることと，たまたま章末のコロフォンを含んでいた422番の1葉が『華厳経』の断簡であることだけで，完本ではあるが，コロフォンのない420番の3葉，何らかの大きな文献の中間部分の断簡と見られる422番の12葉は，ただ経典 (sūtra) とするだけで，それの簡単な内容を述べ，最初と最後の一行を紹介するにとどめている。

その後，423番の *Third Bhāvanākrama* はオーバーミラーの眼に留まり，1935年に英文で簡単な研究が発表され(5)，校訂テキストの出版が予告される。しかし，これは彼の死の年のことであった。ところが1963年になって，オーバーミラーを記念し，写本はモスクワで影印出版される(6)。わが国の湯山明博士はいち早くそれを研究に利用し(7)，さらにこの影印版は1971年のツッチ (G. Tucci) による校訂テキストの底本となる(8)。しかし，他の三文献については，誰にも研究されないまま，現在に至るまで忘れ去られていた。

ところで，Ms. Ind. VII. 23 の来歴であるが，ミロノフによると(9)，当時のダライラマ，つまりダライラマ13世が寄贈し，オルデンブルグ (S.F. Oldenburg) によってアジア博物館に引き渡されたとのことである。さらにオーバーミラーによると(10)，ドルジエフ (Dorjief, 正式名 mtshan nyid mkhan po Ngag dband blo bzang rdo rje) によってチベットからもたらされたとのことであるので，ダライラマに親ロシア政策を薦めて自らその特使となり，1899年から1901年にかけて二度ペテルスブルグへ赴いたドルジエフを通してロシアの手に渡った写本であったと思われる。つまり，もとはチベット政府の所有する写本であった。

NII-Electronic Library Service

【2】 かつて私は，スティラマティ (Sthiramati) 以降の文献中に，無分別智と後得智の典拠として比較的よく引用される *Nirvikalpapraveśadhāraṇī* の約半分程の梵文断簡をギルギット写本中に証定したが[11]，その後しばらくして，インドで再刊されたミロノフのカタログを見ると，ミロノフが引いている最初と最後の文章から Ms. Ind. VII. 23 の 420 番がこのテキストのほぼ完全な写本であることに気がついた[12]。

またミロノフの記す文章から[13]，420 番に続く 421 番の12葉も私には何らかの重要なテキストの一部であるように思われた。12葉は各葉の右端に 13 から 24 の葉番号 (Folio Number) が書かれている。ミロノフは第13葉の表１行と第24葉の裏８行目(最終行)の文章を紹介し，さらに説明を加えて，saṃvara, bhikṣu, skandha について問題にしているとか，第14葉の裏１行目には *Prātimokṣasūtra* という語が読めるとか述べている。しかし私には，これはミロノフの言うように経典の一部ではなく，何らかの巨大なアビダルマ文献，あるいは律の註釈文献の一部のように思われた。しかしその時の私には，この写本が現在どこに保存されているのか，果たして私がそれを取り寄せることができるのかどうかさえ不明であった。入手はあきらめざるを得なかった。

それから数年後，ボンガード＝レヴィン博士に依頼する機会に恵まれ，写本のマイクロフィルムは私の許に届くことになったが，到着を待つ間，私はミロノフの記す 421 番の最初と最後の文章を取り出しては，これが如何なるテキストに属するのか考えていた。しかし，現存のアビダルマ文献や律文献をいくら探しても対応箇所は見出されない。ではこれは全く未知の文献なのか。結局，何も分からずじまいであったが，フィルムの着く直前になって，ミロノフの紹介する文章中の tasmād vijñaptir api prajñaptito 'stīti pratyetavyā という一文が私にこのテキストの証定の鍵を与えた。ここでの vijñapti は vijñaptikarman を指すが，「表業も仮有である」という説明は，説一切有部の教義ではありえないはずである。残された現存文献は唯識派のものしかない。そう考えると，後はこれが『瑜伽論』「摂決択分」の一文であると結論するには，わずかな時間で十分であった。「摂決択分」の梵文写本など残っているはずがないとの先入観があったため，見当外れの文献ばかり探していたのである。以下にミロノフの紹介する梵文に対応する「摂決択分」のチベット語訳と漢訳を挙げておこう。三者は見事に一致する。なお梵文はここでは私の読みを示しておく。

Folio 13 Recto 1, /// (yu)jyate na ca saṃskārotpattimātrakam apahāya anyā kriyopalabhyate cakṣuṣāpi śrotreṇāpi manasāpi tasmād vijñaptir api prajñaptito'stīti pratyetavyā tatra yaḥ kaścid āsaṃvarikakulajāto vijñaḥ svayaṃ cittam abhisaṃskāroty(sic) anayā jīvikayā jīviṣyāmi rocate kṣamate cāsya jīvikā tadā asaṃvṛto vaktavyaḥ (/) a-

Tib. P. ed., Zi 31a5-7, ... (mi) rigs pas / 'du byed 'byung ba tsam ma gtogs par bya ba gzhan ni mig dang rna dand / yid kyis kyang mi dmigs pa'i phyir te / de lta bas na rnam par rig byed kyang brtags pa'i yod pa yin par khong du chund par bya'o / de la sdon pa ma yin pa'i rigs su skyes zin pa gang la la 'tsho ba 'dis 'tsho har bya'o zhes rang gi sems mngon par 'du byed cing / de 'tsho ba de la 'dod pa bzod par byed pa ni de'i tshe na ma bsdoms pa yin par brjod par bya'o //

....(不応)道理。又離唯諸行生，余実作用由眼耳意皆不可得。是故当知一切表業皆是仮有。復次若有生不律儀家有所了別自発期心。謂我当以此活命事而自活命。又於此活命事重復起心欲楽忍可。爾時説名不律儀者。(589b19-24)

* * * * * * * * * * * * * * * *

Folio 24 Verso 8, ///........../ adhyātmapratyayajaḥ punas tad yathā pratyātmam ayoniśo manasikārajaiḥ rāgādiparyavasthānaṃ saṃkleśaiḥ yoniśo manasikārajair vā punaḥ samāpat(t)yādibhiḥ / karmapratyayajaś ca tad yathā pūrvakarmādhipatyena saurūpyavairūpyādibhiḥ svabhāvajaś ca vikāraḥ tad yathā eṣām evendri-

Tib. 59a8-b2, nang gi rkyen las skye ba ni 'di lta ste / so so'i nang gi tshul bshin ma yin pa yid la byed pa las skyes pa'i 'dod chags kyis kun nas dkyis pa la sogs pa kun nas nyon mongs pa rnams dang / tshul bshin yid la byed pa las skyes pa'i snyoms par 'jug pa la sogs pas 'gyur bar byed pa'o / las kyi rkyen las skye ba ni 'di lta ste / sngon gyi las kyi dbang gis gzugs sdug pa dang mi sdug pa la sogs pas 'gyur bar byed pa'o / ngo bo nyid las 'gyur ba skye ba ni 'di lta ste / dbang po de dag nyid kyi......

....二由内縁所生，謂由各別不如理作意所生貪等諸纒煩悩故，或由如理作意所生三摩鉢底等故。三由業縁所生，謂由先業増上縁力感得端正醜陋等故。四由自休変異所生，謂彼諸根....(600c6-10)

【3】 マイクロフィルムの到着を前に，私は所期の目的

NII-Electronic Library Service

を達してしまったともいえるが，届いた写本を読んでみると，果たせるかな，421番の12葉は，『瑜伽論』「摂決択分」の玄奘訳第53，54巻の二巻分のほぼ全体に，また真諦訳『決定蔵論』の後半部に対応する写本の残欠であった。「摂決択分」は玄奘訳『瑜伽論』の51巻から始まるので，第13葉から始まるこの断簡も，失われた第1葉から第12葉までに，第51，52巻に対応する部分が記されていたと考えれば十分計算が合う。従って，これは『瑜伽論』全体の写本の一部ではなく，「摂決択分」のみの単独写本の一部であったに違いない。

また届いたフィルムを見ると，12葉のうち，第15葉と第19葉の数字を読み誤って，フィルムの順序が混乱していたが，それを本来の順序に戻して，チベット語訳，漢訳と比較しつつ一読した。ごく一部の例外を除いて三者はよく一致する。ただし，他の葉が表・裏8行ずつびっしりと書かれているのに対し，第22葉だけは，表4行，裏6行書かれているのみで，玄奘訳で言うと，598頁a段の8行目からb段の8行目にあたる部分が欠落している(14)。恐らく，書写生が別な写本からこの写本を書き写した際に，何らかのトラブルがあって，この部分を写せなくなり，ここに欠落があることを示すため，あえてこの部分を空白のまま残したのであろう。この12葉がカバーする「摂決択分」の内容は，「本地分」の「意地(Manobhūmi)」の末尾に対する決択にあたる部分で，業，律儀，二無心定，虚空，非択滅の決択，および五蘊に関する詳細な説明が与えられている。ただ残念なことに，12葉はすべて左端が破損しているため，完全な梵文は回収できない。

【4】 ここで，この断簡によって新たに知られる事実について報告しておこう。『瑜伽論』を構成する本地，摂決択，摂釈，摂異門，摂事の五分のうち，摂決択，摂異門，摂事の三分については，すでにその原タイトルが知られている(15)。原タイトル不明の本地，摂釈の二分のうち，「本地分」については，「摂決択分」に引用される「本地分」のタイトルのチベット訳 Sa'i dngos gzhi によって Mūlabhūmi あるいは Bhūmimaula などと想定されていたが(16)，この断簡の第24葉裏6行目には，次のように「本地分」に言及する一文がある(17)。

> ....tatra indriyam aparibhinnaṃ bhavatīti tad yathā *Maulyāṃ bhūmau* vistareṇoktaṃ tad yathā adhisthānato vā lakṣanato vā....

玄奘訳で「本地分中に広く説く如し」(600b28)にあたる部分が，tad yathā Maulyāṃ bhūmau vistareṇoktaṃ とある。これによって「本地分」という漢訳語の原語が Maulī bhūmiḥ であったことが確認できる。なお写本で，Maulyāṃ bhūmau vistareṇoktaṃ に続く adhisthānato vā lakṣanato vā....という文章は，「本地分」の一文(18)を「摂決択分」が引用したものであるが，チベット語訳には欠け，全体としては，梵・蔵・漢がよく一致するのに対して，珍しい一例である。また，Maulyāṃ bhūmau の前の tatra indriyam aparibhinnaṃ bhavati という一文は，同じく「本地分」の一文(19)を引用したもので，こちらは，梵・蔵・漢とも一致する。

【5】『瑜伽論』の梵文写本は，パトナのラーフラ・コレクションに「本地分」の写本があるが，パトナ写本の第1葉の表にはウメ体のチベット文字によるチベット語で，「アールヤ・アサンガによって作られた地の五部の中の本地分のインドのテキスト」(20)とあり，また最終葉のコロフォンには，梵文で「無余依地終り」(21)とあって，確かに写本はそこで終わっている。パトナ写本は「本地分」だけで完結した写本に間違いない。

ラーフラ・サーンクリトヤーヤナ(Rāhula Sāṅkṛtyāyana)の書いたものを読むと(22)，ラーフラは，「声聞地」と「菩薩地」を除く「本地分」の写本をチベットのサキャ(Sa kya)寺で，「声聞地」と「菩薩地」の写本をシャル(Zha lu)寺で発見し，全写本を写真に撮り，さらにサキャ寺の写本については，写真に撮った以外に6週間かけて自分の手で写して持ち帰っている。これらの写本はいずれも貝葉本で，書体も，恐らくネパール系写本の最古層に属すると思えるほど古く，紙に書かれた「摂決択分」の写本とは，全く別の写本である。一体「摂決択分」の写本がチベットのどこにあったのか，これ以外の部分は一体どこへ行ってしまったのか，今となっては，我々の手の届かない所へ消えてしまったとしか言えないのかもしれない。

【6】 次に，Ms. Ind. VII. 23 を構成する四文献のうち，『華厳経』とされているものの，いささか説明を要する422番の1葉について触れておきたい。ミロノフは『華厳経(*Buddhāvataṃsakasūtra*)』と言うだけで(23)，これが『華厳経』のどこにあたるのかは触れていない。この1葉は，表には9行書かれているが，裏は5行目に章末のコロフォンが記されて，後は空白のまま残されている。コロフォンは，ミロノフも紹介しているが，Buddhāvataṃsake mahāvaipulyasūtre śatasahasrike granthe Samantabhadracaryānirdeśaparivartto nāma triṃśatimaḥ samāptaḥ //31//(『仏華厳』なる大方広経，10万頌のうち，「普賢行品」という第30章終わり)と書かれている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

この後に数字で31とあるので，trimśatima が正しいのか，数字の31が正しいのか判然としないが，確認すると，この断簡は『六十華厳』では第31章，『八十華厳』では第36章，チベット語訳『華厳経』では第42章にあたる「普賢菩薩行品」の末尾の断簡であることが判明した。

この1葉には「普賢菩薩行品」末尾の偈頌のうち，第78偈から最後の第121偈までが含まれている。おもしろいことに，各偈頌の後に偈頌番号が数字で示されている。ネパール系写本では，偈頌番号がないのが普通なので，極めて特異な写本のように思われる。なおこれには葉番号は記されていない。従って，これが大『華厳経』の巨大な写本の残欠なのか，「普賢菩薩行品」だけの単独写本の一部なのかが問題となる。コロフォンに第30章（あるいは31章）と書かれているので，大『華厳経』の一部のようにも思えるが，一方，この断簡の裏面は，5行だけ書かれ，後は空白になっているので，それからすると，ここで終わっていたようにも思われる。

また，「普賢菩薩行品」が第30，あるいは31章となると，これは『八十華厳』およびチベット語訳『華厳経』とは，章構成において全く異なり，翻訳の一番古い『六十華厳』に対応することになる。チベット語訳と一致することの多いネパール系写本で，これは異例である。偈頌番号を記すことと併せても，この断簡はネパール系写本ではあるが，性格としては，中央アジア系写本に近いのかもしれない。

いずれにしても，『華厳経』の写本としては，「十地品」「入法界品」以外の唯一の写本の断簡なので，貴重なものであることは間違いない。私が不思議に思うのは，この断簡についてはミロノフがはっきりと『華厳経』と言っているにもかかわらず，現在に至るまで『華厳経』の研究者でこれに気付いた人が一人もいなかったことである(24)。

【7】最後に，私がここで証定した三文献について，漢訳とチベット語訳の対応箇所の一覧を示しておこう。

(420)『入無分別法門経（*Nirvikalpapraveśadhāraṇī*）』Skt. Fragments in the Gilgit Mss.：松田和信 1981, Tib. P. ed., No. 810, Ch. 施護訳，大正 No. 654，訳者不明敦煌写本：Ueyama, Eastman & Broughton 1983.

(421)『瑜伽論（*Yogācārabhūmi*）』「摂決択分（Viniścayaṃgrahaṇī）」断簡，Tib. P. ed., No. 5539, Zi 31a5-59b2, Ch. 大正 Vol. 30, 589b19-600c10（巻53-54)，『決定蔵論』大正 Vol. 30, 1026a8-1035a17, cf. 宇井伯寿『印度哲学研究』（第6巻）pp. 620-704.

(422)『華厳経（*Buddhāvataṃsakasūtra*）』「普賢菩薩行品（Samantabhadracaryānirdeśaparivarta）」断簡，第78-121偈，Tib.「第42章」P. ed., No. 761, Si 73a7-75b1, Ch.『六十華厳』「普賢菩薩行品第三十一」大正 Vol. 9, 610b1-611a29，『八十華厳』「普賢行品第三十六」大正 Vol. 10, 261a8-262a9.

1800年代の終わりから1900年代の初めにかけての列強諸国のチベットへの野心の狭間で，チベット政府からロシアに渡った24葉の梵文写本は，ミロノフとオーバーミラーの手で，我々にその姿を現わしかけたものの，オーバーミラーの死によって忘れられ，50年を経て，ここにやっとその内容が明らかにされた。この写本は私が日本で研究することを許可されたので，すでに出版されている *Third Bhāvanākrama* を除く420, 421, 422番の三文献については，近い将来に必ずテキストとして出版することを約束して稿を閉じたい。

1988年5月16日

【参考文献】

Mironov, N. D.

(1914) *Catalogus codicum manu scriptorum Indicorum qui in Academiae Imperialis Scientiarum Petropolitanae Museo Asiatico* (Petoropoli).

Obermiller, E.

(1935) "A Sanskrit Ms. from Tibet—Kamalaśīla's Bhāvanākrama", *The Journal of the Greater India Society*, Vol. II-1, pp. 1-11.

(*1963) *Kamalaśila Bhāvanākrama—Traktat o sozercanii* (Moscow).

Sāṅkṛtyāyana, R.

(1936) "Second Search of Sanskrit Palm-Leaf Mss. in Tibet", *JBORS*, Vol. XXIII-1, pp. 1-57.

(1938) "Search for Sanskrit Mss. in Tibet", *JBORS*, Vol. XXIV-4, pp. 137-163.

(1942)「西蔵旅行記—梵文仏典写本の発見」中島莞爾訳（『海外仏教事情』8-1）pp. 30-58.

Bhattacharya, V.

(1957) *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga* (Calcutta).

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

Schmithausen, L.
(1969) *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścaya-saṃgrahaṇī der Yogācārabhūmi* (Wien).
湯山　明
(1969) 「Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* に引用された維摩経」(『東方学』No. 38) pp. 105-90.
Tucci, G.
(1971) *Minor Buddhist Text* (Part III)—*Third Bhāvanākrama* (Roma).
松田和信
(1981) 「*Nirvikalpapraveśadhāraṇī*について―無分別智と後得智の典拠として」(『仏教学セミナー』No. 34) pp. 40-49.
袴谷憲昭
(1982) 「瑜伽行派の文献」(『講座大乗仏教〈8〉唯識思想』) pp. 43-76.
Ueyama, D., Eastman, K.W. & Broughton, J.L.
(1983) "*The Avikalpapraveśadhāraṇī*: The Dharani of Entering Non-Discrimination", (『龍谷大学仏教文化研究所紀要』No. 22) pp. 32-42.

【注】

(1) 調査の経緯と，私が担当した梵語文献については，拙著『インド省図書館所蔵中央アジア出土大乗涅槃経梵文断簡集――スタイン・ヘルンレ・コレクション』(東洋文庫，1988年3月) を参照していただきたい。

(2) Mironov (1914). このカタログは数年前 Lokesh Chandra によってインドで再刊されたが，再刊年は記されていない。

(3) 東洋文庫に保存されている『法華経』河口本（貝葉本）と共通する書体（いわゆるナーガリー体）で書かれているが，この書体は紙本には珍しい。

(4) Mironov (1914), pp. 330-334.

(5) Obermiller (1935). 本論文は入手困難であったため，インド省図書館の松岡久美子さんから複写を送っていただいた。その後，掲載誌はインドで再刊されたようである。なお，Obermiller (*1963), pp. 12-22 には本論文のロシア語訳が，さらにロシア語訳からの英訳が *The Tibet Journal*, Vol. II-1 (1977), pp. 28-34 に掲載されている。

(6) Obermiller (*1963). 本書は京都大学の御牧克己助教授から複写をいただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

(7) 湯山明 (1969).

(8) Tucci (1971). 本書には湯山明博士の書評があるので参照していただきたい。*Indo-Iranian Journal*, 1975, pp. 265-270. Tucci によると (p. x), この写本は彼が用いた *First Bhāvanākrama* の写本よりも新しいという。

(9) Mironov (1914), p. 330, n. 1.

(10) Obermiller (1935), pp. 3-4.

(11) 松田和信 (1981).

(12) Mironov (1914), pp. 330-331.

(13) *ibid.*, p. 331.

(14) この部分に対応するチベット語訳は P. ed., Zi 53a2-b6.

(15) 袴谷憲昭 (1982), pp. 59-62.

(16) *ibid.*, p. 59, Schmithausen (1969), pp. 17-18, n. 4.

(17) 玄奘訳，600b28，チベット語訳，P. ed., Zi 59a5.

(18) Bhattacharya (1957), pp. 57, *l.* 21-58, *l.* 1.

(19) *ibid.*, p. 57, *l.* 18.

(20) 'phags pa Thogs med kyis mdzad pa'i sa sde lnga las Sa'i dngos gzhi rgya gar gyi dpe bzhugs / 恐らくこの一文は写本を利用したチベット人によって記されたのであろう。

(21) Yogācārabhūmau nirupadhikā bhūmiḥ samāptā / とある後，さらにウメ体でチベット語が一文記されているが，写真が不鮮明で私には読めない。

(22) Sāṅkṛtyāyana (1937), pp. 6-20.

(23) Mironov (1914), p. 332.

(24) 華厳の原語が Avataṃsaka なのか Gaṇḍavyūha なのかの議論にかんしても，このコロフォンの持つ意味は大きいのではなかろうか。

NII-Electronic Library Service